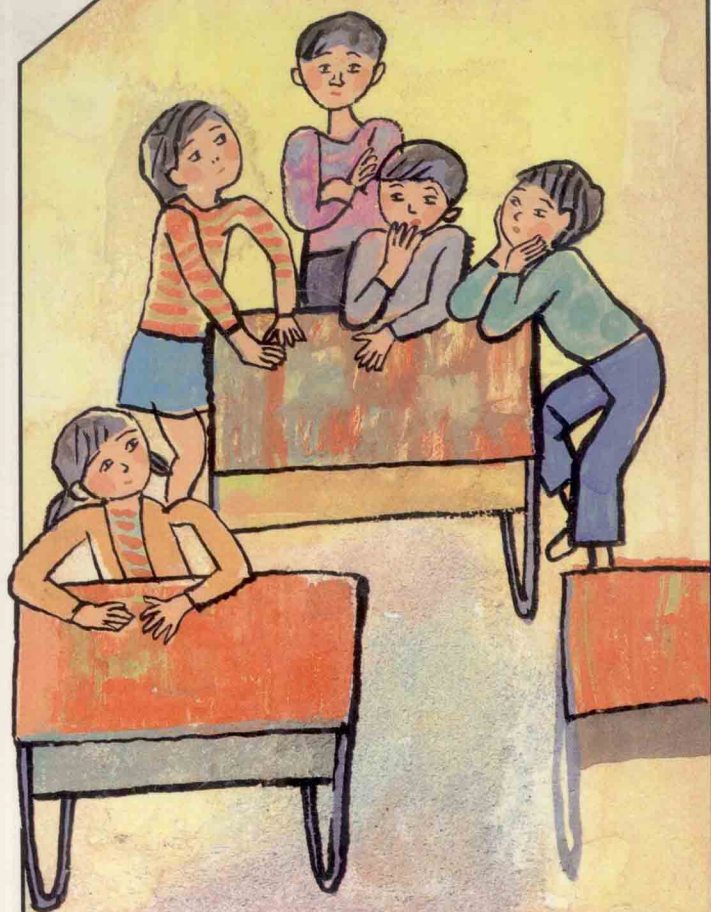


若葉學習塾

下卷

三浦朱門



新潮社版

石渠學習塾

下卷

三浦朱門



新潮社

わかば がくしゅうじゅく
若葉學習塾

下巻



著者 三浦朱門 (みうらしゅもん)

昭和五十六年十月十日 発行

昭和五十七年三月十五日 二刷

発行者 佐藤亮一

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 神田加藤製本

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一二 編集〇三(266)五四一

定価 九五〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

下巻／目次

闇の中の手（承前）

5

夏休み

23

乳離れ

71

春の目ざめ

107

暴力

149

あとがき

214

へ上巻*目次へ

家出娘

母性愛

御対面

いじめっ子

血を分けない兄弟

闇の中の手

装幀*太田大八

若葉學習塾——下卷

闇の中の手（承前）

十三

毎月一度、学年別の学力テストをする。専門クラスは受けるのが義務だし、補習クラスは専門クラスに行きたいと思う者が自主的に受ける。専門クラスはこのテストで二十五位以内を取ることを原則に三十名ほどで編成されていて、専門クラスに入っても、二度続けて四十番以下になると、専門クラスから補習クラスに移される。だから、専門クラスの者にとっては、学力テストは非常な関心事である。成績発表は塾生たちが来る前に事務室脇に掲示するのだが、ぼくは六月分は、一時限の授業中に発表するように指示した。

指示した相手は、今度、事務専門に入ってもらった金岡貴美子さんという四十七の婦人である。息子は大学を出て商社マンになり、エジプトにいる。娘も息子の同僚と結婚

させた。彼女は七年ほど前、夫を癌で失った。つまり、ハイティーンの息子、ミドルティーンの娘を、女手一つで上げたのである。当今では邸宅と言っておかしくない百五十坪の敷地に建てた立派な家があるのに、夫も子供もないガランとした家がさびしいといって、若葉塾に住みこんで事務をやってくれることになった。

おしゃべりなのが欠点だが、気のいいおばさんである。彼女は結局、二間を占領した。家財道具を全部始末した、と言っていたくせに、持物を収納するのに独身用のほうの一間。彼女が寝起きする部屋は襖一枚で明石春子と続いている。バス・トイレはおかげで女性用として独立した。ここは以前、ぼくと加代子が暮っていた所でもあるから、小さな台所もついている。

春子はどうやらお姑さんしゅうとめと一緒に生活しているような感じになったようだが、金岡さんが春子の虫よけ役を以て自認していることは、春子にとっては、結構安心できることらしく、殊に、廊下に出ずに、女性専用のバス・トイレを使えるようになったのはうれしいと加代子に話していたという。

金岡さんは、教師一同の動静をばくに報告してくれる。大里は麻雀麻雀をしすぎる。山口は普段はいいが、大酒を飲むと、酒癖が悪い。栗原は……。

そんな金岡さんだから、実力テストの発表を二三時間おくらすとぼくが言くと、理由を聞ききたがった。しかしぼくは言う訳にはいかない。六年専門クラスに休み時間、人いない状態にして、盗難が出るかどうか調べるのがその目的だからだ。

「何故、遅らせるんです」

「間違いないかどうか、調べようと思って」

「もう明石さんとあたしとで、チェックしましたよ」

「もう一度ぼくがする」

「でも、奥さまのお話では、塾長先生はそういう事務的なことをなさると、必ずミスをなさるとかで……」

「うるさい。調べるったら調べる」

ぼくもつい本気で腹をたてた。彼女は五十近いから、ぼくなんか、息子の同級生くらいにしか考えていないのだ。ずけずけと言いくいことを言う。でも塾にはそういう人がいた方がいいのだろう。後で加代子を通して、怒鳴って悪かった、と謝っておこうと思った。

一時限の授業中に成績をはり出しておいたら、休み時間に、夏休中の時間割を取りに来た子が見つけて、たちまち塾生たちが集まって、子供の汗のにおいが事務室の中にまで漂よってきた。

ぼくは建物の外の方から廻って、六年の専門クラスの教

室がのぞける場所に立った。夕方の、今にも雨が降りそう、とは言っても、七月初めである。外は探偵をする、ぼくが困るくらいに明るい。

教室の中には誰もいない。ノートや筆箱や男の子の野球帽が机の上に散らばっている。ぼくは自分がつくづく情なかった。自分の塾の生徒が悪いことをするかどうか、塾長であるぼくがワナを作って待ち構えている。漱石は探偵という仕事を軽蔑した、というより、人に探偵されているという不安を持っていたという。そして探偵という仕事に、しばしば下等な、という形容詞を使っている。窓の外に立っていて、本職の刑事ならともかく、今のぼくは、漱石の言う、下等な仕事をしているという実感があった。

突然、泉が部屋の中に入ってきた。彼女は確か四位だったはずだ。彼女の両親が望んでいるミッシェン系の女子校に進学できうる成績である。しかし、もし彼女に悪い癖があったら……。

泉はふと、机の上の野球帽を手にとった。大洋ホエールズのキャップである。専門クラスともなるとオレは並みじやないという意識が働くのか、巨人ファンはすくないようだ。もっとも土地柄、川崎に近くて、野球を見るなら川崎球場といった事情もある。

泉はすぐ帽子を机の上に置いて、教室を出ていった。何

かを取ったのかどうかもわからなかった。

十四

翌々日、浜口が遅刻した。ぼくも午後、久美子と、例のディ・エッケという喫茶店で会っていたもので、遅れそうになって、車のスピードを出していた。授業はないが、実力テストの結果と志望校について相談したいと言う父兄と面会の約束があった。成績の発表の後では、一しきり、こういった相談の約束が続くのである。

下を見ながら、ノロノロ歩いている浜口を車の中から見かけたので、

「おい、浜口、そんなことしてると遅れるぞ。乗せてやるから、急げ」

とドアを開けてやったのだが、浜口は、

「ううん、落とし物しちゃったからね、探しながら行く方がいいよ」

「落とし物？」

「うん、バッヂ」

浜口の頭を見ると、ホエールズの帽子をかぶっている。

さては、と思ったが、素知らぬ顔でたずねた。

「どこにつけてたんだ」

「帽子の横っちょのとこだけだね。昨日は塾のない日だったけど、社会の臨時があったからね。小沢のヤツとぶざけながら、この辺歩いてて、帽子とりっこして、あの時、おちたと思うんだ」

見ると、浜口の帽子にはまだ幾つかバッヂがついている。

「ついでるじゃないか」

「違うんだよ。昨年の夏ね、富士登山したんだよ。その記念のバッヂだからね、それが、落ちちゃったんだ」

「そんなもん、探したって見つかるもんか。今年、また行けよ」

「うん、でもねえ、惜しいんだよなあ」

ぼくは、一昨日の泉の行動を思い出した。彼女は誰もいない教室に戻ってきた。全員が事務室の脇の成績発表表を見ていることを知っていたことだろう。そして、浜口の帽子から、バッヂを一つはずした。それはぼくからはよく見えなかった。しかし、泉は帽子を投げ出すと、すぐ教室を出ていった。また、成績発表の人の群れに加わるのにきまつている。たとえ、一時、彼女がいなかったことに気付いた人がいたとしても、トイレに行っていたと言えはすむ。

ぼくがかけたワナは成功したようだった。

塾についてからは、忙がしくて、盗難事件など考える時

間はなかった。一喜一憂という言葉があるが、受験生の親は憂いっぱなしである。何故かという、成績がよいとさらに難しい学校を受けさせようとするからだ。成績が悪ければ一ランク下に志望を変更するかという、そういうことはしない。過去の最高の成績を頼りに、努力すればその高い点を何度でも取れるものだと思っているのだ。

その日の相談というのも、六月の成績をみると、学力は登り坂だから、もっとよい学校を、という相談ばかりだった。こういう父兄を見ると、息も絶え絶えにジョギングしているオッサンを見ているような、つらい気持ちになる。外国の写真なんかみると、美しい林の中を堂々と走るみごとな体の男女がいる。ああいうのが正統なジョギングなのだろう。

それに反して日本はというと、ガニ股、出腹のおじさんが、車の排気をもろにあびながら、うつろな目をして、よろめく如く、あえぐ如く走っている。ジョギングの時に鞭打たれるのは本人の心臓だからまだいい。いざとなったら、バツタリ倒れて死ぬだけのことだ。しかし、受験の場合、よろめきつつも、精一杯、踏んばって走る脚が親だとすると、そのピッチにあわせて、酷使される心臓は子供なのだ。子供はなかなか悲鳴をあげない。しかし、心臓は痛みだしたら、もうかなり症状は悪くなっている。

父兄たちの相手が終わって、ホッとしたら、やがて、塾の終る時間になった。ぼくは泉に授業が終わったら来るようにと、金岡さんに伝言してもらった。

泉の身上カードを読みなおしていると、ノックの音がして、泉が入ってきた。へアバンドをしている。

「新しいのを買ってもらったね」

「ええ、父が今度はなくしてもいいようにと、半ダースも買ってくれました」

「そうか、それはよかった。で、塾や学校へ行く時は、いつもそうしてるの？　つまり、へアバンドのことだけだ」

「ええ」

泉はちょっと、警戒する表情になった。つまり、悪い成績を見せつけられたような、真剣な顔になった。

「坐ってごらん」

泉を坐らせて、へアバンドを外してみると確かにスッと軽く外れる。

「こうやって取られても気がつかない？」

「いえ、今なんか気がつきました。気がつかないこともあります。でも、取られたのは、もういいんです。父に新しく買ってもらいましたから」

「よくはない。新しく買えば、済む部分もある。しかし、人の心に残した傷は、そんなことでは消えない」

十五

泉は妙な顔をした。妙な、としか言いようのない顔だった。ぼくの言葉を疑うような、またぼくの言葉が彼女を慰めているのか、責めているのか、見当がつかないといった感じで、あらゆる感情がはつきりした形をとれずに、中途半端で戸惑っているという表情だった。ぼくは言葉が続けた。

「一番、傷つくのは、取った人だと思ふ。何故なら、この人は、それが欲しかったのではないし、それが絶対に必要だという訳でもない。人を困らせよう、それを見て楽しむという考えだから……」

泉は平気な顔でぼくを見ている。だから、ぼくは、彼女への疑いが、実は根拠のないものだったのだろうかという気がした。プロ野球の帽子など、いくらでもあるものだし、泉が手に取ったのが浜口ののだとは、ぼくは断言できない。また、彼女がバッジを外すのを見たのでもない。

彼女は確かに帽子をいじってはいた。それだって、理由はいくらでもつく。男の兄弟のいない彼女としては、野球帽が珍らしかったのかもしれない。一人だけ教室に戻ってきた理由も、自分の成績が予想外によかったことのよろこ

びを、一人で噛みしめたかったのかもしれない。五位以内に入ったのは、確か今度がはじめてのはずだ。

教室でたった一人で野球帽をいじっていた泉と、バッジをなくした浜口の野球帽を結びつけようとしても、すくなくとも裁判所では証拠としては通用すまい。浜口も、実力テストの発表を見に行っているすきに、バッジを盗まれたとは言っていない。翌日、塾に行く途中、友人とふざけて、帽子を取りっこしているうちに落としたと言っている。

テストの結果の発表をずらせ、教室の外から様子をうかがい、そして泉が入ってきて他人の物をいじったというだけで、ぼくは彼女に疑いをかけている。元々、ぼくは彼女を疑っていたから、そう思うのではないか。ぼくは何の罪もない一人の女の子に罪をなすりつけようとしている。後ろめたさに、ぼくは顔を赤らめた。

「もう一度、ヘアバンドを盗まれた時のことを話してくれないか」

やはり同じだった。トイレに落ちていたヘアバンドが友人の田口によって発見されたあたりは現実感がある。誰がどう言っても、何先生がどうした、といった、具体的なことが加わる。しかし、肝腎の盗まれた時のことが、何度たずねてもはつきりしない。

「気がついたら、左手で髪をおさえながら勉強してたんで

す」

「で、すぐ盗まれたと思った？」

「え、いえ、落としたと思いましたが。あたしって、ぼんやりですから」

泉は決してぼんやりな子ではない。ぼんやりでなさすぎるくらいな子だ。

「落としたっていうと、授業中、髪をいじっているうちに外れたとか？」

「ええ、でも机のまわりにはありませんでしたし……」

「盗まれた、とわかったのは？」

「トイレに落ちていたからです。ひどい。大切にしているものを……」

泉の目に涙があふれてきた。正直言っただけは、彼女が犯人だと疑っている。次々に同級生の物を盗んでいながら自分に疑いがかかるのをさけるために、進んで被害者の一人になろうとした可能性が大きい。そのためには、落としたのではなく、盗まれたと言いはらなければならない。

それで、自分でわざとヘアバンドをトイレに棄て、それを他の人に発見させたのだ。自分の罪をかくすためとは言いがた、大切にしている物を、トイレに棄てるのは、つらいことであつたらう。とにかく、彼女は小学校入学の時に買ってもらった筆箱を六年生の今まで使っているような

子だ。筆箱などというものは大概の子は二三年しか使わないものなのである。

もっとも、泉の涙は、本当に彼女が被害者なのであつて、彼女が大切にしていた物を、それも頭につける物を、トイレになんか棄てられて、という涙であることは充分に考えられる。

ぼくはどう考えてよいかわからなかった。本当を言えば、ぼくは泉を疑っている。同時に、自分が預かっている塾生の一人である泉を盗癖のある子だと疑っている自分に、うんざりしている。いや、そういう自分を憎んでいる。ここは裁判所でも警察でもない。ひょっとすると、教育の場でさえないのかもしれないのだ。塾なんてのは、要するに、子供にテスト向きの技術を教えこんで、すこしでも「良い」上級学校におしこむ所にすぎないのかもしれない。

それが問題を放棄するための口実でしかないことは、自分にもわかつていた。しかし、ぼくは、この問題を考えるのを諦めた。だから、泉の肩をたたいて言った。

「ま、君はヘアバンド買ってもらったからいい。だけど、今度はバッジが盗まれた。どうも、ぼくがその現場を見てしまったらしい」

泉がふと目を大きく見開いた。

「さ、いいから帰ろう。遅くなったから、先生が送ってゆ

こう」

車の中で家に帰りつくまで、泉は一言も口をきかなかった。

十六

ぼくに関する限り、ということは、若葉塾に関する限り、盗難事件は終りにするつもりだった。いくらかすねた言い方をすれば、学習塾なんて、まともな教育機関じゃないのだから、子供の内面の問題は家庭と学校でやってくれ、という感じである。

また、まともな言い方をしても、塾は警察でも裁判所でもない。犯人を洗い出す必要はない。犯人らしいと思われる泉に、犯人ならわかる程度の忠告をしておいた。その程度でやまるものならやまるし、やまらないうすれば……。それはウチの塾の手におえる問題ではない。そして泉が犯人でなければ、ぼくの言葉は被害をうけた泉に対して、この件についての考え方をのべたという印象を、彼女はうけるだろう。

もし、犯人がほかにいるとすれば、そのうちに、何となくわかってくるだろうから、その時はその時だ。バッジの件については、被害者の浜口は盗まれたとは思っていない。

落としたと思っている。それならそれでいい。塾の盗難は、泉のヘアバンドを最後に、一件もおこっていないことになる。

ぼくは被害者たちの身上カードのコピーをマンションの屋上で焼いた。前日まで曇ってはつきりしていなかった天候が、その日はさわやかに晴れたから、エレベーター塔の上に出たかったのだ。シベリヤの森林と、まだ春の冷たさを残している日本海を吹きぬけて渡ってきた風が肌にも肺にもこころよい。

とにかく、探偵商売はガラにあわない。でも、終ってよかったと、今日は青く見える関東山地の稜線を心ゆくまで眺めて部屋に戻ったら、電話が鳴った。泉の母親の酒井純子夫人からだった。

「この度、泉は塾をやめさせようと思ひまして、その件でちょっとお考えをうかがいたいと存じまして……」

「おやめになる。はあ、そうおっしゃるなら、私としては、やめるな、とは申せませんが、おいでになるんなら、どうぞ」

電話を切ると、加代子が、

「どうしたの？」

とたずねるから、盗難事件と泉のかかわりを、ただし、彼女が容疑者であることを除いて説明した。純子夫人は娘

に疑いをかけられたと怒鳴りこんでくるのだろう。それに對して加代子が泉の容疑を知つていて抗弁すると面倒なことになる。良家の夫人でも、ヒスをおこして争えば、あられもないといつたことになりがちだ。

いつだったか、グループ懇談会の際に偏差値の説明をしていたら、一人の夫人が、テストの採点ミスがしばしば見られると、くどくどと訴えた。すると別の夫人が、

「でも、奥さま、人間のやることには、ある程度のミスは仕方がないんじゃないやございません？」

と言つた。すると、文句を言つていた夫人が、キツとなつて、

「公立中学に行かれる方は、どんな成績でも落第することがございせんから、おっとり構えていてもよろしゅうございましょうけれど」

「では、公立進学者の学力は劣つてしていると……」

「いえ、私はそれは申しません。ただ、私立は一点、二点の差が物を言う……」

そして、二三分後には、二人の夫人は、唇をふるわせながら、罵しりあつていた。どういふ訳か、敬語だけがちゃんとついているのがおかしい。

だから、純子夫人と加代子が言いあうような場面にはしたくなかつた。泉がやめるなら結構。もしぼくの推察通り、

彼女が犯人であれば、これで完全に事件は片付く。「これにて一件落着」と、ぼくは教師たちに、個人の名前をあげずに、事の次第を報告できる。

やがてやつて来た純子夫人は紺を基調にしたワンピースを着ていた。色は地味だけれど、夏向きの薄く涼しそうな服である。襟とカフスとベルト、ハンドバッグが白かつた。靴は紺色である。その白いハンドバッグを見た時、ぼくはそれを知つてゐると思つた。ピンク映画を見に行つていた女も、こういうのを持つていた。肩から下げるための金色の鎖がついてゐる。円筒型に近い硬質のバッグで、それがデパートのショウケースにぶつかつた時、ガチリと音がして、ぼくは何かが壊れたのかと思つたのを覚えてゐる。

してみると、あの女は顔立ちが似てゐるだけでなく、やはり純子夫人だったのか。泉はよく勉強する娘なのに盗癖があるのだとすると、性的なことはすべて汚らわしいとも言いそうな純子夫人がピンク映画を見にゆくこともありうるのだ。ぼくはこの母と娘がぼんやりわかつてきたように思つた。

「娘は塾長先生から泥棒あつかいをされて、もう恥ずかしくて、塾にいられない、と泣いて申しまして……」

「しかし、昨日あたり、ごく普通にしておられたようですよ」

「それはあの子にだって意地があります。泥棒だと言われている……」

「お言葉ですが、私は泉さんが犯人だなんて言つた覚えはありません。被害にあった人たちと、一人一人話しあつて、本当に傷ついたのは、盗まれた人よりも、盗んだ人なのだと、と言つたのです」

加代子は麦茶を持ってきた。ぼくはあまり好きではないというのに、手数がかららないというので、夏になると、加代子はお茶がわり、ビールがわりに、麦茶を牛に飲ませるほど作つて、冷やしておく。オフクロは甘い麦茶を作つてくれたけれど、甘味をいれるのは、わが上條家だけの風習なのだろうか。

十七

「いえ、塾長先生に呼ばれたのは、ほかの方は一度だけ。

娘は二度でございます。そしてヘアバンドが盗まれた事情が腑におちないと、しつこくお尋ねになつたとかで、泉は大変に悩んでいました……」

「でも、ヘアバンドは取れやすいものでしたなあ」

「だったら、落とされたのかもしれないわね」

と加代子が口を出した。純子夫人は、今は塾長とやりあ

つてゐるのだから、余計なことを言わないでくれ、という風に加代子に向きなかつた。それでも加代子は平気で言葉を続ける。

「トイレでうつ向けになつて落とす。拾えないから黙つてゐる。後からそこを使つた田口さんが見つける。丁度、泥棒さわぎの時だから、これも盗まれたということになる。

泉さんとしては、今さらおとしたとは言にくい」

「すると、やはり泉は嘘をついたことになりましたね」

と純子夫人は、娘が犯人ではなくなつただけでは納まらない。ぼくも口を出した。

「その理論に欠点がある。泉さんがなくしてから、田口幸子さんが発見するまでに、丸二日たつてゐる。泉さんがトイレにおとしたきり、二日後に幸子さんがそこを使うまで、誰もそこに行かなかつたとは思えない」

「ほかの子はそのトイレを使つて知つていても、黙つていたかもしれない。このごろの子つて、そういう点、冷たいから。ただ幸ちゃんは泉ちゃんがなくして探してたのを知つていたし、見ただけで、それだとわかつた！」

「そんなことが事実であろうと、なかつたところでよろしいのです、うちの泉は犯人と言われたのですから」

「いえ、そんなことは絶対に申しません」

「娘はそう思いこんで、心を傷つけられました。塾長先生

はこれからも子供のお相手をなさるなら、もうすこし、デリケートな子供の心理を勉強なさった方がよろしいかと思ひます」

そう言つて、純子夫人は立ち上つた。そして入口まで見送りに出た。ぼくを見上げて、唇をゆがめて冷笑しながら、「野球帽からバッジを盗む現場を見た、と先生は泉におっしゃつた。誰も知らないその事件を泉におっしゃることは、つまり、泉、お前が犯人だ、ということでしょう。泉は確かに一人で教室に戻つたそうです。誰のだか知らないけれど、野球帽も手にとつた。でも、バッジなんか取らない、と申してます」

そう言つて、純子夫人は出ていった。

これできまつた、とぼくは思つた。ぼくは泉にはバッジがなくなつた、盗難の現場を見たとは言つた。しかしそのバッジは野球帽についていたとは言わなかつたし、現場とは、彼女が教室に一人で戻つてきて、野球帽をいじつてゐる所だとも言わなかつた。もし彼女の容疑が濡れ衣なら、バッジと野球帽を彼女が結びつけるはずがない。被害者の浜口だつて、バッジは盗まれたとは思つていない。落としたと信じてゐるのだ。

でも、ぼくはこれ以上、犯人を追及する必要を認めなかつた。泉がやめるなら、それで充分。当分は、塾に今まで

みたいな盗難事件はおこらないであらう。

しかし、そうも言つていられたなかつた。二三日して泉の父の酒井文雄から、嚴重な抗議の手紙が来て、ぼくの返事次第によつては、裁判に訴えろと書いてある。火の粉がふりかかつてきた訳だ。しかしぼくは泉を犠牲にして、自分の潔白を証明したくはなかつた。事を穩便に、つまりうやむやのうちに収めたかつた。要は塾の中に盗難事件などという面倒なことがおこらなければよいのである。

ピンク映画の女と、あの物堅い純子夫人が同一人物であることを証明すればいい、と思いついた。別に恐喝するつもりはない。母親に二重人格的な所があれば、娘にもあるのだし、バッジが野球帽から盗まれたのを知つてゐるのは泉しかいないのだと説明すれば、純子夫人は納得し、夫を説き伏せて、今さら訴えてもどうなるものではなし、といった形で、事件を片付けようとするであらう。それには、いささか自己嫌惡におそれ精神衛生に悪いが、探偵のマネゴトをしなければならぬ。

十八

ぼくが川崎のピンク映画を見に行った時刻は、確か一時半ころだつた。そして、純子が川崎に行くとなれば、住所